

---

# 鷺宮家の別荘

空風灰戸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鷺宮家の別荘

### 【Zコード】

Z6324E

### 【作者名】

空風灰戸

### 【あらすじ】

ホームページ完成後も依頼人の来ない西山探偵事務所に、彩菜の昔からの友達である鷺宮奈美がやつてくる。彼女は、彩菜に相談を持ちかけ、鷺宮家の父と兄の間のトラブルを解決してくれと頼まれ、鷺宮家の別荘にいくことになる。

「彩菜、またやつが盗みを働いたよ」

彩菜は、レポートを書く手を止め、新次の前にあるパソコンのディスプレイをのぞいた。見出しへ、怪盗シーファン一千円相当の宝石を盗む、と書かれていた。

怪盗シーファン それは、彩菜にとっての大敵だった。一度、彼女は怪盗シーファンとあつたことがあり、それは目と鼻の先にいたのだ。それなのに、取り逃してしまったのだから。

彩菜は何もいわず、レポートを書くのを再開したので、新次は話を促すようにいった。

「まったく、困ったことだよな。警察も予告状が来てるっていうのに、逮捕できないんだから」

「それだけ、怪盗シーファンの手口がきめ細かいところまでねられてるということよ。私のときより、手口が巧妙になってるっていう話しだし」

「それに比べて、うちらは、まったく依頼はなしで、成長したくてもできない状態だね」

「ホームページ効果もなし、ということよ」彩菜は苦々しくいった。新次が探偵事務所に勤務することになつたきっかけのホームページ作成の、ホームページはすでに完成していた。しかし、完成して公開したのはいいものの、いまだに依頼人が増えることはなく、今までどおりの閑散とした探偵事務所が続いていた。

新次はまたパソコンに向かつた。このままじゃ、自分の身もまずい、と思つたからだつた。

それからしばらくすると、閑散とした探偵事務所に突如チャイムが鳴り響いた。彩菜の書いていた文字がそれによつてぶれた。

新次は、パソコンから目を離して、事務所のドアを開けた。彼は執事のような仕事もこなすことで、給料アップを図ろうとしていた

のである。ドアを開けると、そこには一人の女性があり、その女性を見たとたん、彩菜は喜び驚く声で言つた。

「奈美！」

「こんにちは」奈美と呼ばれた女性はうれしそうに言つた。

彩菜は立ち上がり、中に入るよう促した。新次はよく状況が飲み込めないまま、奈美を中にいれドアを閉めた。

「今日はどうしたのよ？」彩菜は奈美を椅子に座るように促しながら言つた。「事務所に来るのは久しぶりじゃないの」

「（）に来たからには、ちょっと彩菜に相談があつて……」

奈美はそういうながら、新次を横目で見た。

「あ、こいつは新次よ。事務所の手伝いとか、まあいろいろしてもらつてるの」彩菜は奈美の視線に気づいて新次を紹介した。「で、新次。奈美はね、私の昔からの友達で同級生だつたのよ。もつとも、私が留年したから、いまは大学三年だけだね」

「初めてまして、辻風さん」奈美は挨拶をした。それにならつて、新次も挨拶を交わした。

鷺宮奈美は、セミロングほどの中さの髪で目はパッチリし、その瞳がはつきりとわかる。万人の目から美人とはいがたいものの、それに近い綺麗な女性だつた。

「もしかして、噂のお手伝いさんといつのは辻風さんのこと？」奈美は彩菜に尋ねた。

「噂のお手伝いさんって？」新次は口を挟んだ。

「あなたが事務所のお手伝いさんっていうことよ」と彩菜。「ワトスン役になりたがつて、推理小説好きな、ね」

「それはそうだけど、いつからお手伝いさんになったのさ？ そんな話は聞いてないぜ」

「もうそれに近いぢやない。今もドアを開けたんだし、表現するにはお手伝いさんが一番楽なのよ。だが、ところで、奈美。今日はまたどういった用件で？」

新次はすばやく自分の定位置にすわり、パソコンの画面に文書ソ

フトを起動した。その一行目に新次は「依頼人・鷺宮奈美」といれ、改行した。

「さっきも言つたけど、相談しにきたのよ」奈美は言つた。「恥ずかしい話なんだけど、私のお父さんと祐介兄さんがお金の問題でけんかしてるのよ。なんでも、祐介兄さんが大きな借金をしてしまつて、その返済ができないというの。だから、返済分をお父さんに貸してもらおうとしているの。彩菜も知つてるとおり、私のお父さんは、機械関係の有名会社の社長だから、お金はあるのよ。祐介兄さんがせびりうとしているお金が出せないというわけじゃないの。

でも、お父さんは祐介兄さんにお金を貸さないのよ。祐介兄さんは、お父さんは昔から仲が悪くて、それでお父さんは出す気はないんだと思うの」

奈美はそこで話をきつたので、彩菜はいった。

「それで、私はどうすればいいわけ？」

「お父さんと祐介兄さんの間に入つて、和解交渉してほしいのよ。お父さんと祐介兄さんの仲がよくなるように」

「でも、それは家族の問題だから、私が入るべきじゃないと思つんだけど」と彩菜。

「実は、お父さんは祐介兄さん这件事を許そつとしてるのよ。でも、素直になれないのよね、きっと。どうしても、はねつけるようになってしまふから、相変わらずなままなの。彩菜は昔からの友達だし、お父さんも彩菜のこととは知つてるでしょ？だから、その間に入つて、許すようにサポートしてほしのよ」

「なるほど、そういう仲介なのね。じゃあ、ここは、友達としてそれに参加するわ。どうやって、サポートするかは考へてるの？」

「ありがとう彩菜。今はこれといつて決めていないんだけど、お父さんは借金の返済をしてあげるかわりに、自分の会社に入つてもらつて、ちゃんとそれを返してもらひ、ということを考えてるらしいの。祐平兄さんもお父さんの会社に入つてゐるしね。それをうまく使えばなんとかなるんじゃないかしら？」

「そうね。じゃあ、それ受けるわ」

「ありがとう、彩菜。今度、私たち一家が別荘に集まるの。木曜日からお父さんとお母さんはは行くんだけど、木曜日はあいてる？兄さんたちは木曜日にこくから、お父さんと話すには木曜日にしていいんだけど」

「ごめん、木曜日はちょっと講義があるのよ。木曜日の午後からなら大丈夫だけど」

「じゃあ、金曜日の午後からにしましよう。兄さんたちもそのときにはくるし、実行もできるしね。みんな来るから、引き合わせるという作業はいらないしね」

彩菜はうなずくと、木曜日のことを話し合い始めた。そのときに、新次も役に立つかもしれない、という理由で同行することとなり、新次は理由が何であれそのことを内心喜んでいた。

相談が終わり、奈美が探偵事務所を辞去すると、彩菜はいった。「記録はできたの？」

「もちろん、ぱっちりさ」

新次はディスプレイに映し出されている画面を彩菜に見せた。そこには、先ほどの文書ソフトが起動しており、奈美が話した内容がすべて入力されていた。

「さすが、新次はパソコン関係は強いね」彩菜は新次をほめた。「あの話をすべてタイピングで打ち込めるんだから」

「これぐらいは朝飯前さ」新次は自慢そうに言ひ。

「これで、細かいところを忘れてしまったとき、役に立つわね」

彩菜はまだまだ新米探偵で、すべてを記憶するのには限界があった。依頼人の要点をはずすことの多い話なら、なおさらだ。そのため、彩菜は新次のタイピングスピードの速さを見込んで、依頼人の依頼内容をパソコンに入力し、忘れないように記録するようにしたのである。

「じゃあ、それを印刷しておいてね。奈美の別荘に持っていくから」

鷺宮家の別荘に到着する一時間ほど前から雪が降り始めていた。だが、奈美が運転する車のタイヤにはチエーンは巻かれていなかつた。

鷺宮家の別荘は、雪が多く降るこの地にあるだけあって、屋根には一工夫されており、積雪対策がなされていた。奈美の話によると、この別荘はもともと避暑用の別荘であるため、冬にはこないから、雪の重みに耐えられるような設計になつてているのだという。まだまだ雪は弱々しく、今にでも降り止みそうなため、その設計の機能が使われることはなかつたが。

別荘の中に入ると、外の寒さとは一変し凍えきらうとしている人をも一瞬にしてあつたかくさせるほど暖かかった。もつとも、これは寒いところから暖かいところへ来たことによる感覚の麻痺であるため、実際には少し暑い温度だった。

「ただいま」

奈美はリビングに一人を案内した。リビングには、二人の男女があり、共に年齢はすでに五十を越しているようだった。

「おお、彩菜ちゃん。久しぶりだね」そういったのは奈美の父の貞治さだはるだつた。

「お久しぶりです、おじさん。それにおばさんも。お元気そうでなによりです」

「よく来たねえ、彩菜ちゃん」と奈美の母の悦子がいった。

「そちらの男の子は誰だね？」貞治は新次を見ながらいった。

「辻風新次といいます。彩菜の事務所で事務をしておりまして。それで、奈美さんに招待に預かつたものですから」

「おお、そうかそうか。ゆっくりしていっててくれたまえな」「その指輪、綺麗ですね」と彩菜は唐突にいった。

彩菜は唐突にいつた。その指輪というのは、貞治の指にはめてあるもので、何カラットあるか凡人にはわからないが、大きなダイヤが付けられている指輪だった。ダイヤモンドは、弱い部屋の明かりにでもきらきらと輝きをみせ、まさに宝石の王様であるといつてゐる

かのようだつた。

「よく気づいたね」貞治はうれしそうにいう。「このダイヤモンドは特別なダイヤでね。軽く五千万円はくだらないダイヤなんだよ。寝る前にはいつもぴかぴかに磨いていてね」

「ところで、兄さんたちは？」

奈美はあわてて、父の話をさえぎつた。貞治が、このダイヤモンドの話になると自慢げに長々と話始めるのを知っていたからだつた。「まだ来てないよ」と悦子。「特にこれといった電話もないし、そろそろ来るんじやないかねえ」

奈美はうなずいて、二階に一人を連れてあがつた。この家は二階建てであり、二階には寝室用の部屋が六つあり、フリールームが二つあって、合計八つの部屋で占められている。

寝室七つのうち、五つは鷺宮一家の寝室だつた。もう一つひとつは客人用の寝室であつた。その二つの客人の用の寝室にそれぞれ彩菜と新次はとまることとなつた。

部屋割りが決まり、一階へ三人が降りていると、突然彼女らの耳に怒号が飛んできた。彼女らはリビングに飛び込むようにして入るとい、貞治が別の男に向かつて怒号を飛ばしていた。

「お前にやる金などないといつただろ！」

「こっちだつて、好きに頼んでるわけじゃないんだ。借金が返せなかつたら、どうなるかわかつてんだろうが」

「そんなこと、おれが知つたことではない。とにかく、金はだせん！」

男はふんつと鼻を鳴らすと、彩菜たちには田もくれず部屋を出て行つた。彩菜はそのとき気づいたのだが、もう一人男がいたのである。

貞治は、彩菜たちに気づき冷静さを取り戻そうとしていたが、すぐには無理だつたようで「家族内の争い」とを見せてすまなかつた」というと部屋を出て行つた。

貞治が出て行くと、もう一人の男が言った。

「兄貴の例の話だよ、奈美」

「わかつてゐるよ、祐平兄さん。彩菜、祐平兄さんを覚えてる?」

「彩菜?」

祐平は、その名前にビックリか聞き覚えがあるよう、「え、奈美の言葉を鶲鶲返しだ。

「ああ、彩菜つて、あの彩菜ちゃん? ほら、西山探偵の」

「そうですよ、祐平さん」と彩菜。「私も祐平さんのことは覚えてましたよ。子供のころ、ときどき遊んでくれましたものね」

「ああそりだつたねえ。もう何年も前の話だが。そつちは誰だ?」

「辻風新次です」新次は名乗つた。「彩菜の事務所で事務関係をしています」

「そうか。それで、今日はどうしてこんな山奥の別荘まで?」

鷺宮祐平は、鷺宮家の次男である。奈美は長女だが、祐平よりは年下である。身長は百八〇センチほどある長身で、奈美と同じく田はパツチリと開かれている。ふんわりとしたバリトンボイスの持ち主だった。

奈美は、本来の目的とは違つことを祐平に話した。祐平は決して口が軽いわけではないが、こいつことは隠密にやるべきだと奈美は思つていたからだつた。だが、この場合は彩菜は話してもいいのではないか、と思つていたものの、それを口に出すのは控えておいた。

祐平は、納得しかねるように首をかしげていたが、特になんともいわず、その場を辞去した。

後に、貞治に怒号された人物は、奈美と祐平の兄である祐介であることを彩菜と新次は知つた。祐介は祐平、奈美と同じく目がパツチリしており、長身で祐平とほぼ同じなのだが、髪が祐平よりだいぶ長かつた。奈美が言うには「借金をしてるから、散髪代に出すなら借金を返済するのに使つてる」とのことだった。

貞治と祐介の仲は、彩菜と新次がいる中でも険悪だつた。特に夕食時には重々しい空気が漂い、美味の料理を食べているのにそれが

美味でなくなってしまった。そんな夕食が終わると、祐介と祐平は一階へあがつていき、悦子を除いた余人はリビングに落ち着いた。

貞治を除いた三人はトランプをして、時間をつぶし、間をおくと彩菜は立ち上がり、ゆっくりと貞治に話しかけた。

「おじさん、ちょっとお話を

「なんだい、彩菜ちゃん？」

「祐介さんはどうしたんですか？　なにやら、口論をしていましたが」

貞治の顔がみるみるうちに、赤くなってきたのが、遠くにいた新次と奈美にもわかつた。

「話すことでもないよ、これは身内の問題だ」貞治の声には怒りが混じっていた。

「その問題を一人で抱え込んでしまうのはよくないのでは？　おじさんには考えがあるのでしきう？　それをいえずに困つてゐる

「なぜ、そのことを？」貞治は怒りと一緒に驚きも混ぜながらいつた。

「ご存じないかもしませんが、今の西山探偵事務所の探偵は私なんですよ。今日、ここに来たのは奈美から相談があつたからなんです」

貞治は驚いた様子で、奈美を見た。奈美は困惑することなく、父をみ続けた。

「悪いが私から相談を持ちかけるつもりはない」貞治の声は元に戻つた。

「もちろんそういうでしょう。これは奈美からの相談です。おじさんから、相談されることはあります。ですが、私はおじさんのサポートすることができます。祐介さんと仲直りしたいのでしょうか？」

一人で考えず、私たちにお話をお聞かせ願いませんか？　三人寄れば文殊の知恵ともいいますし

「さつきも言つただろう。これは我々家族の問題だ」

「先ほどもいいましたが、私は探偵です。新次は探偵事務所の記録係などをしています。そして、奈美は鷺宮家の間人です。探偵たるもの、秘密は厳守しますよ。おじさんが家族の問題が外に出るのを恥すべきことだ、と考えてるならば問題はありません」

貞治の表情から、怒りが引いていったようだつた。だが、まだ決心がつきかねるようで、口をもぐもぐさせていたが、それは言葉にならなかつた。

「この件については明田まで待つてくれ。少し考えを整理したい」やつとのことで、貞治はそういうと、まるで逃げるよつてリビングから出て行つてしまつた。

「どうも、失敗しちやつたみたい」貞治が出て行くと、彩菜はいつた。「ごめんなさい、奈美」

「気にしないで」と奈美。「お父さんをあそこまでやつたんだから、よしとしましようよ」

そのとき、別荘内にチャイムが鳴り響いた。このチャイムは玄関のもので、悦子はキッチンから出、玄関のドアを開けた。

「どちら様ですか？」悦子は尋ねた。

ドアを開けた先には、一人の男がいた。一人とも登山をする格好をしており、この雪のため防寒具も身にまとつていた。

「すいません、実は私たち道に迷つてしまいまして」と男はいつた。「ここからどうやつていけばいいのかまったくわからないのです」

暗くて雪がどれだけ降つてているかはあまりわからなかつたが、少なくとも彩菜たちがきたときより、雪は積もつてゐるようだつた。

「まあ、こんな真つ暗なところじゃもう里には降りられないでしょう」と悦子。「ちょっと、中に入つてお待ちくださいませ。奈美！」

お客さんをお通しして。さあさあ、中で温まつてください。こんなどころの立ち話では寒いでしょう」

奈美が客人一人をリビングへ案内すると共に、悦子は一階へあがつていつた。少しすると悦子と共に貞治がリビングへと入つてきた。

「この雪の中大変ですね」一通り挨拶を済ませると貞治は言つた。

「なにせ、この暗さですし、この雪なので車も出せませんので、今田はこちairoにお泊りになられてはいかがでしょ?」

客人たちはそれを断ろうとしたが、さすがに完全に断りきれない様子だった。この雪なのだから、それも無理はないが。結局、彼らは念願の暖かい部屋にとまることができるようになった。だが、部屋は残つていなかつたため、考えた末、彩菜が奈美の部屋にとまり、彩菜がいた部屋に客人たちはとることとなつた。

客人たちは、井上と上田と名乗つた。フードを下ろしたから詳しく述べたが、二人はほぼ同じ身長で、体格も似ていた。ただ顔立ちは異なり、井上は厳しそうなイメージを思い浮かべせる顔の男。上田は対照的にやさしそうな男だった。ちなみに、玄関での会話は上田が行つていた。

その一人を見て、祐平は少し首をかしげているのに彩菜は気づいた。だが、祐平は特に何も言わずその場は終わつた。

翌朝、鷺宮家の別荘は騒がしかつた。廊下を走る音、誰かが騒ぎ立てる声。そんな状況で、おちおちと眠つてゐる暇はない彩菜と奈美は起き上がり、廊下へ出た。

「どうしたの、お父さん?」

廊下には貞治が、かなりあせつてゐるようすで走つていた。

「どうしたもこうしたもない!」貞治は憤慨してゐるようだ。「おれのダイヤがなくなつたんだ!」

彩菜は眉を吊り上げた。

「お風呂に置き忘れたとかは?」奈美は言つた。

「そんなことはない。寝る前にはちゃんとあつたことを確認してあるんだ」

「寝てゐる間になくなつたわけですね?」と今度は彩菜。

「そのとおりだ。おれが眠つてゐる間に、祐介が忍び込んで、ダイヤを盗んだんだ」

「祐介兄さんが?」奈美は驚いたようだつた。

「ダイヤを盗むのはあいつしかいないだろ！　おおかた、ダイヤを現金に換えようというんだろ？　そうはいかん。これからとっちめてやる！」

祐介は、何度も荒っぽくたたかれるドアの音に反応して、たつた今起きたようだった。彼は、いきなり怒号を飛ばす憤慨した父を見て、いったい何事かを尋ねると、貞治はさらに憤慨し、祐介を罵り始めた。

「俺はダイヤなんか盗んじゃいない！」状況を理解した祐介はいつた。

「じゃあ、誰が盗んだというんだ、え？　お前しかダイヤを盗むやつはいないだろうが」

「だったら、部屋を調べてみるよ。そんなことしても無駄な努力だがな」

確かに無駄な努力だった。貞治は、祐介の部屋をあちこち調べまくつたが、ダイヤは見つからなかつた。

それがわかると彩菜はいった。

「とにかく、全員リビングに人を集めてください。これは私が扱う事件ですよ」

リビングに、鷺宮家の五人と客人一人、探偵と探偵の事務所事務員が集まつた。各自はばらばらの椅子またはソファに座り、彩菜はリビングの入り口にいた。

「状況は簡単です」と彩菜はいった。「昨夜、何者かがおじさん貞治さんの部屋に忍び込み、ナイト・テーブルの上にあつたダイヤの指輪を盗んだ。昨夜就寝前に、おじさんが指輪があつたのを確認し、今朝方なくなつているのを発見したことから、深夜に何者が忍び込んだのは間違いないでしょう」

誰もそのことに口を挟むものはいなかつた。彩菜は続けた。

「そして、窓の外を見てください」

彩菜はカーテンをあけ、外の景色を見えるようにした。窓の外の

景色はひどいものだつた。いや景色と呼ぶ代物でもなかつた。外は大吹雪となつてゐたのだ。

彩菜は続けた。

「この大吹雪です。いつからこいつなつたのかはわかりませんが、私たちが眠る前にはこんな状態ではなかつたはずです。もっとも、ふぶいていなくとも、あの夜の暗さではどうしようもないことでしょうが」

「どういうことだね？」貞治は言つた。

「つまり、この大吹雪では誰もこの別荘から出ることもできない。できたとしても、途中で倒れてしまふのがおちでしょ。そして、この別荘にいる人々は一人たりともかけていない。つまり、ダイヤを盗んだ犯人は、この中にいるということになります」

リビング内は一瞬にして凍つた。まるで、外の吹雪が部屋の中に流れ込んでしまつたように。

「でもまつてくれよ」と新次がいつた。「まだ吹雪く前にこの別荘に来て、帰ればいいんじやないか？」

「それは除外していいと思うの。なんで、わざわざこんな吹雪が吹く中でこんなところまで来たの？ もつと簡単なときに来るのが普通じゃない。それにまだ雪が積もつていなかつた木曜日に、おじさんたちはいたんだから、そのときにくればよかつたじやない。なぜ、昨日じゃなければならなかつたのか、説明ができないわ」

「なんか、考えがあつたのかもしれない」

「そうかもね。でも、ダイヤだけを盗んでるみたいだから、そんなときに入る理由は考えられないわ。ねえ、新次、今からこの別荘をみて回つて、窓やドアが壊れているところとか不審な点がないか、調べてみてよ。もちろん玄関のドアもね」

新次は、不満な表情でそれに従い、部屋を出て行つた。

部屋には吹雪の音と暖炉の火が燃える音だけが響いていた。部屋にいる人々はみな、重々しい顔もちをして、不安そつた。ただ、貞治だけが違い、祐介をにらみつけるようにみていた。客人たちは

特に不安そうな顔を持ちをしていた。彩菜はそれをみて「犯人として疑われるることを恐れているのではないか?」と考えた。

新次が部屋に戻ってきた。彼は、どの部屋の窓も壊れていなかつたことを彩菜に告げた。彩菜はうなずいた。

「おばさん、昨日はちゃんと別荘の鍵をかけましたか?」

「もちろんかけましたよ。それに、寒かつたですからあける人などはいなかつたでしようが」

「さあ、これで外部犯説はほぼ捨ててもいいでしょう。そりは思わない、新次?」

新次は黙っていた。どうも悔しがっているようだった。

彩菜はいった。

「では、内部犯説とするど、眞さんの身体検査及び部屋を調べなければなりませんね」

それに反発しないものなど、奈美と貞治ぐらいのものだった。身体検査など受けたくない、それがみんなの本音であるのだ。一気に批判を浴びた彩菜は、少しひるんでしまったが、立ち直つていった。

「この中に犯人がいるのはほぼ確実です。この際白黒はっきりさせようじやありませんか。みなさん、それぞれを疑つてこの吹雪がやむまでごすのはいやでしょう?」

それにもみなは反論してきたが、次第にそれは弱まりはじめ、同意こそしないものの、いやいや身体検査及び部屋を捜索することを彩菜と新次は許可された。彩菜は女性の身体検査と部屋のチェック。新次は男性の身体検査と部屋のチェックをした。

このことで、新次は内心喜んでいた。自分がこんなことできるといふことは、自分は疑われていないつまり、自分は彩菜に信じられているのだと思ったからだつた。今までの彼の扱いと対比すれば、それは喜ばしいことであるのだ。

だが、新次のそんな気持ちとは裏腹に彩菜は憂鬱だつた。それから、新次の報告を聞くと、さらに憂鬱となるのだった。

「どうだった、彩菜?」

全員の部屋のチヨックが終わると、新次は言った。

「こっちはなし。まあ、奈美は私と一緒にだつたわけだし、おばさんはやりそうもないものね。そっちは？」

「こっちもなかつたよ」

「そんなばかな！」彩菜はいつた。「それじゃあ、どの部屋にもないことになるじゃない。そんなことはありえないわ」

「でも、これは事実なんだ」と新次。「俺が見てきた中では、ダイヤモンドの指輪なんてなかつた。それは確かさ」

彩菜はただただ唖然とするだけだった。

その日の晩、彩菜は夕食をとらずじつとリビングにあるソファにすわり、暖炉の火を眺めていた。外はまだ吹雪いているようだが、その音は昼間と比べれば落ち着き、明日の昼ごろになれば、完全に収まってしまうだろうと思われた。

それは彩菜をあせらせる要因のひとつだった。彼女は、身体検査及び部屋の捜査でダイヤが発見されなくとも、内部犯説を捨てなかつたのだ。彼女は、何が何でも外部犯説はありえない、そう考えていたのだった。

新次や奈美は、彼女の失敗をどうとも思わなかつた。少なくとも彼女の気がおちるようなことは思つていなかつた。彼ら一人は、彩菜が失敗を犯したことに落胆しているのだと思つていたのだ。彼らは、彩菜に慰めの言葉をかけたりしたもの、彩菜は一言も返事をしなかつた。夕食の誘いに関しては、一言いらないと返してきたのだった。

夕食後、新次は客との井上と上田と話がかみ合つたらしく、リビングへ入り愉快に話を始めた。どうやら、井上と上田も推理小説通らしく、新次はそのことで話に熱中したのだ。だが、客たちは、海外ミステリーに関してはよくわからないような返事をし、日本ミステリーに関してはよく話をしてきた。

新次たちの話題が暗号関係に変わると、リビングにいらついた調

子の貞治が入ってきた。彼は乱暴に椅子に座り、彩菜に話しかけた。だが、彩菜はそれをぶきつちょに断り、ひたすら黙想に入っていた。ちょうどそのとき、奈美が入ってきたので貞治はいい相手を見つけたとばかりに、彼女を呼びつけて、ぐだぐだとダイヤを取ったのは、祐介に違いないというのだった。

「でも、そんな証拠はないでしょ？」奈美は言った。

「もちろんそうだとも。風呂に入ってる祐介の部屋に今さつき入ってきたのだが、ダイヤなどなかつたし、あいつの服にもない。いつたいやつはどこに隠したのか。巧妙にかくしよつてからに！」

「それだけ探してないなら、祐介兄さんじゃないのよ。ねえ、わたし思つたんだけど、お父さんがうつかり見落としてるということはないの？」

「そんなことがあるわけないだろ？ おれはちゃんと部屋を隅々まで探して回つたんだからな」

「逆におおまかに調べたほうが見つかつたりするかもよ。ほら、灯台下暗しっていうぐらいだから」

「だが、隅々まで探したんだから、灯台下暗しもなにもあるまい」  
そのとき、新次がいつた言葉が彩菜の耳に入り始め、貞治と奈美の会話は耳に入らなくなつた。

「乱歩といえば、ポーですよね。ポーも黄金虫という暗号ものを書いてますし。まあ、俺としては失われた手紙のほうがすきなんですが。モルグ街の殺人はどうも、俺にはあわなくて……」

そのときだつた。まるでソファが倒れるような勢いで、揺らぎ彩菜は立ち上がつていた。新次たちはその彩菜の様子に驚き、一斉に彼女に視線を浴びせた。そして、彼女は突然走り出し、階上へ上がりそれぞれの部屋を調べ始めた。

それをおつて新次が彼女を追い、彼女を発見したとき、彩菜の手にはダイヤモンドの指輪が握られていた。

「おお、これは確かに俺のダイヤ！」

リビングに全員集まると、彩菜は貞治にダイヤを返した。貞治は驚いた様子で、彼女とダイヤをみつめ、感激の言葉を口に出しながらダイヤを受け取り、指につけた。

「いつたい、これをどこでみつけたんだ？」

「それは犯人の部屋からです」と彩菜は冷静にいった。「その犯人の部屋は、もともとは私の部屋だった。そう ゆっくりとみな の顔が犯人に振り向かれていく 「犯人は、井上さんと上田さん、あなたがた二人なんじゃ ありませんか？」

みんなの視線が一気にその二人に注がれた。二人は困惑しているよう なそぶりを一瞬見せたが、そぶりを一瞬にして消していった。

「なにをばかなことを」と井上。「なんで、我々がお世話にしても らっている、この家で泥棒をはたらかななければならないのだ。そ れに部屋に誰かが忍び込んで、ダイヤを隠したのかもしれない」

「そんなに全力で否定されなくても」彩菜は笑いながらいった。「 今ここについてはわかりませんが、いずれあなた方が犯人であること にはすぐわかると思うんですよ。おじさん、確かにそのダイヤは寝る 前にいつも磨いてるんでしたよね？」

「そうだとも」

「だつたら、里に下りてから警察にそのダイヤを渡して指紋をみれ ばわざることです。寝る前には指紋をふき取った。そしてその後誰 かがそれを持ち出したなら、その人物の指紋がついてるはず。もち ろん、私とおじさんの指紋は別ですよ」

「犯人は手袋をしていたかも知れないじゃないか?」新次はいった。

「そうすれば指紋はつかない」

「そうかもしれない。これは私の空想かもしれないけど、おそらく ダイヤを盗んだらすぐにこの場を去るつもりだったと思うの。いつ たわよね、あの雪の中でわざわざここまで来る必要はないって。そ れなのに、あの日を選んだのか。

まず、この別荘に偶然を装つて入り込み、隙を見計らってダイヤ を盗む。そして、その後すぐに、おそらく少しほはれたところに用

意しておいた車に乗つて逃走するつもりだった。そうすれば、ばれるのは朝になるし、あの雪だつたら朝になれば吹雪くだろうと予想したのよ。吹雪けば自分たちを思うものはいないし、警察に連絡するにも電話線も切つて連絡できないようにしてあるはず。そうすれば、簡単に逃亡することができる。そうすれば、指紋をつけても問題ない。手袋をするという発想を出す必要もなかつた。

だけど、計算外が起こつた。実行完了後、逃亡しようとしたら外はすでに吹雪いてしまつていた。このままではもうでれない。この別荘に泥棒自らまで閉じ込められてしまつた。そのとき、犯人はダイヤを元に戻せばよかつたのに、戻さなかつた。なぜか？ 盗んだダイヤを隠して、隠した場所に自信があつたから。せつかく盗んだダイヤですもの、そう簡単に手放すわけにはいかなかつたんじよう

「その隠し場所はいつ たいどこなんだ？」貞治は尋ねた。

「新次と井上さんと上田さんが話しているとき、海外ミステリーの話になるとよくわからないことを言い出していた。それは、海外ミステリーを本当に知らないのか、または海外ミステリーの話をしてはダメだと思った。でも新次と話せるぐらいなら、海外ミステリーのことを知っているのは当たり前だと私は思った。そして、新次はついに井上さんと上田さんが恐れていた言葉を口にした。ポーの『失われた手紙』」

井上と上田の表情がみるみるゆがんでいく。彩菜はそれをみつつ、話を続けた。

「読んだことがあるかどうかは知りませんが、失われた手紙のトリックをそのまま彼らは使つたんです。そう、だから隠し場所なんていうたいそれたものではなかつた」

「それがなんだつていうんだ」井上はゆがんだ表情で言つた。「それが私たちが犯人であるという証拠にでもなるのか？」

「証拠は指紋ですよ。まあ手袋をしていれば証拠も出ませんが」

井上の表情が少し明るくなつた。彼は何かをいおうとしたとき、

先に彩菜が言葉を発したので、それはさえぎられた。

「ところで、祐平さん」彩菜は祐平をみながら言った。「祐平さんは、ここの人たちを最初見たとき少し首をかしげていましたよね？どうしてですか？」

まつたく趣旨から離れているその質問をされ、こたえか面食らつた祐平だったが、その質問に答えた。

「いや、どこかで見た顔だな、と思つて」

「今、見ていてどこで見た顔かは思いだせますか？」

祐平はまじまじと、井上と上田の顔を見た。二人は、それから顔をそらしみられないようにしていった。

しばらくすると、祐平はあつと声を上げた。

「そうだ。会社でみたんだ！ 少し前、商談できた一人！ 親父も確か、この一人にはあつたはずだ」

彩菜は満足げにつなずいた。

「おそらく、おじさんのダイヤの話を聞いたんでしょう。おじさんはダイヤの話をするのが好きみたいですし。それで、どこからかこの別荘に集まることも知り、祐介さんと金銭トラブルを抱えてることも知つた。そして、祐介さんに罪をかぶせようとした」

井上の表情がまた暗くなつた。

「さて、じゃあどうしてそんな会社の知り合いの人が、知つているといわなかつたのか。そして、おそらく近くにあるであろう車についてお尋ねしましよう。どうして、ここに来たのか？ いざれにしても、警察の事情聴取を受けることは避けられないでしょうね」

井上は肩を落とした。それをみた上田はよくわからない言葉で、反論してきたが彩菜はぴしゃりとその反論に答え、上田もついに肩を落とすこととなつた。

彩菜の推理は一個だけ当たつていなかつた。最も重要な証拠としていた指紋であるが、それは当たつておらず、井上は手袋をして計画を実行していた。だが、車の件については当たつており、結果的に

にはその車に關して問い合わせられたことによつて、井上と上田は逮捕という運びになつた。

彩菜は気になつていたことのひとつとして、なぜ一人で実行したのか、ところどだつたが、このことも警察から証言を得ることができた。なんでも、井上と上田は同期で仲のよい関係であり、実行犯である井上は車が運転できないといつのである。動機は、共に金がほしかつたといつ。上田は金にはかなり困ついていたようで、そのことでこの計画に加担したといつ。

事件が無事解決して、数日後、西山探偵事務所に奈美がやつてきた。

「事件が解決してよかつたね、奈美」彩菜はいつた。

「ええ、おかげさま。それにあの事件でもひとつのことも解決したしね」

「そうね。おじさんは、祐介さんを疑つたことをわびると同時に、自分の考えを切り出したんだもの。それで祐介さんも承諾したし、万事解決」

「結局、彩菜は何もやらなかつたよな、その件に関しては」新次は笑いながらいつた。

「まあ、いいじゃない。解決したんだし。ねえ、奈美、今度久しぶりに遊びにでもいかない?」

「ぜひいくわ。新次君は?」

「あいつはダメよ。ちゃんとここで事務仕事をしてもらわなきゃちやー!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6324e/>

---

鷺宮家の別荘

2010年10月8日15時20分発行